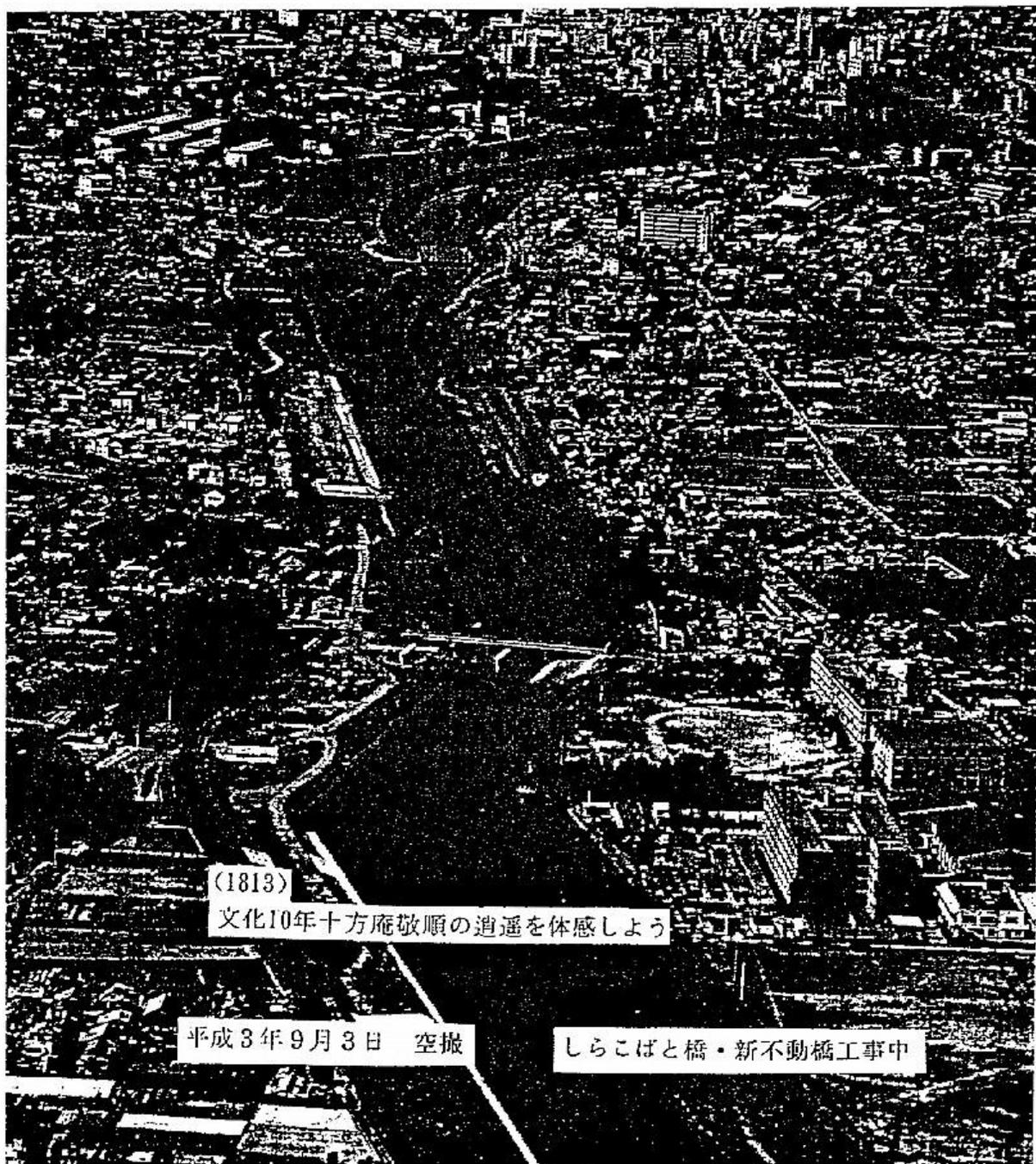


平成11年9月26日(日)

# 瓦曽根溜井と 大相模不動尊を訪ねて



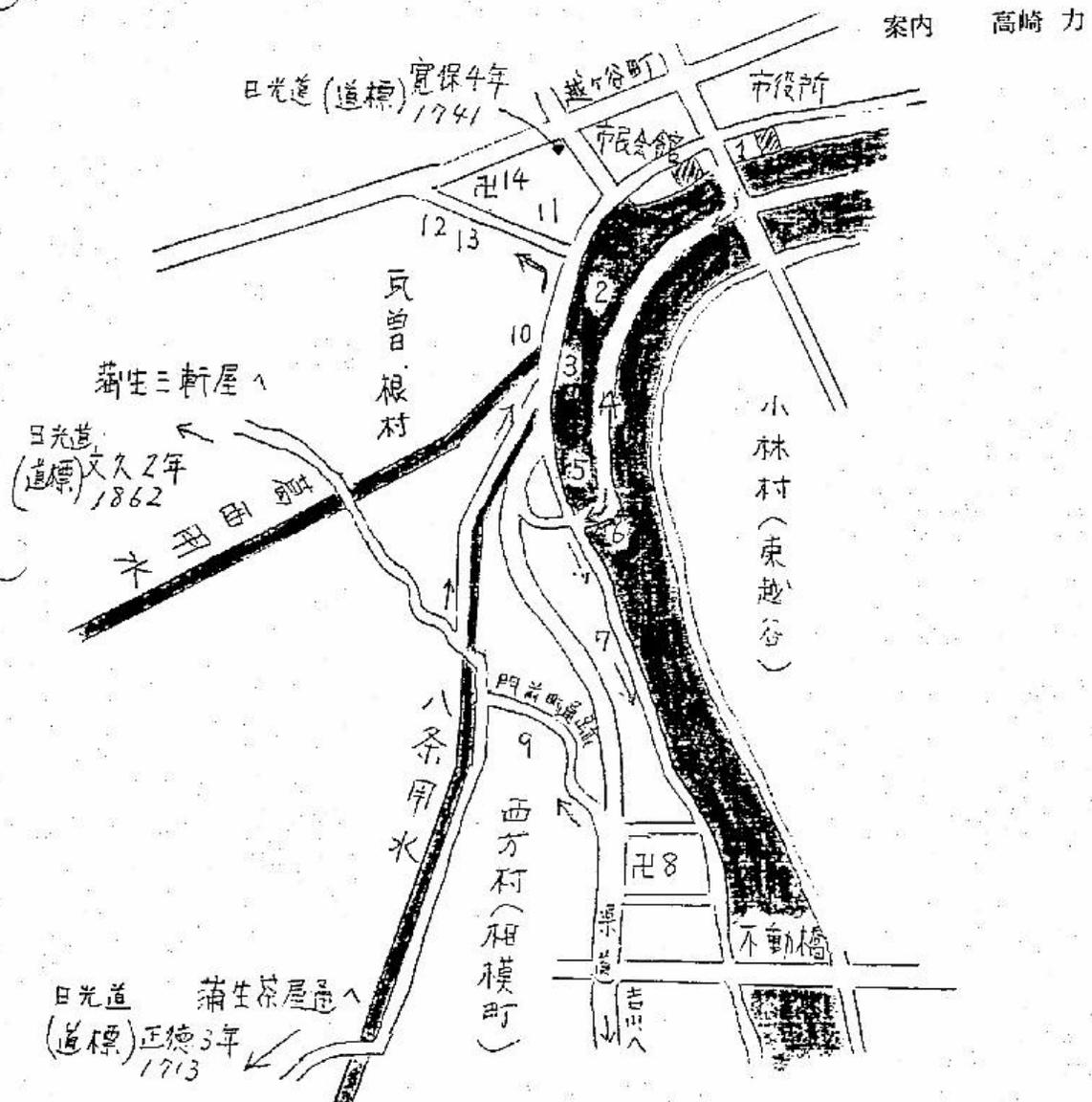
(1813)

文化10年十方庵敬順の逍遙を体感しよう

平成3年9月3日 空撮

しらこぼと橋・新不動橋工事中

- 1 「相扶共済」の碑 → 2 土橋・へいわばし跡 → 3 瓦曾根溜井坎
- 4 河岸場跡 → 5 石堰跡 → 6 赤水門跡 → 7 画家斎藤豊作生家跡
- 8 真大山大聖寺 → 9 門前町 → 10 番小屋跡・「瓦曾根溜井防水記」の碑  
(トイレ休憩)
- 11 中村彦左衛門家 → 12 「貧民救恤」の碑 → 13 観音堂の力石 → 14 千徳丸供養塔



国民健康保険発祥の地越谷

# 「相扶共済」の碑

所在地 越谷市役所前庭

〔表面〕 相扶共済 厚生大臣 林 譲治書

〔裏面〕 古来越ヶ谷の地たる人文の発達を以て知られた相扶共済を使命とする国民健康保険の此処に発祥したる亦宣なる哉 当町有志の創設した越ヶ谷順正会は国民健康保険制度の先駆者として当時天下の耳目を鍾めた (以下略)

昭和二十三年七月一日

厚生省顧問 商学博士 清水 玄撰 并書

昭和10年12月 越ヶ谷順正会発会式

昭和13年3月 国民健康保険法制定：企業中心・地域は任意組織任意加入

昭和23年 市町村公営の強制加入

昭和33年12月 改正国民健康保険法公布：国民皆健康保険制度の発足

## 変貌する瓦曾根溜井

(図1・写真1、6)

一五九六 慶長年間  
一六一四

関東郡代伊奈忠次によって農業用水確保の為、瓦曾根溜井草堰が創設された。八条用水坎・四ヶ村用水坎。

一六一三 慶長18年 八条領排水路を掘る：後に西葛西用水路に転用する。

一六二九 寛永6年 荒川本流は久下(現熊谷市)にて締切り入間川筋に流す。

一六五九 万治2年

よって元荒川・故荒川と呼ぶようになる。

元荒川流量減少したので古利根堰（松伏・増林間）より鷺後用水（後に葛西用水・逆川とも呼ばれる）を合流させる。

一六六四 寛文4年

瓦曾根草堰を石堰に改造する。

堰巾 十間 (一・八m)

敷巾 二間二尺 (四・二m)

堰高 四尺九寸 (一・五m)

この時の残り石にて西方村大聖寺と瓦曾根村照蓮院の手水石を造り奉納する。

一六七五 延宝3年

本所（現江東区）上水を瓦曾根溜井より引水する（亀有上水、小梅上水、白堀上水ともいう）

一六八〇 延宝8年

瓦曾根溜井より谷古田用水を引く。（写真2）

一六九〇 頃 元禄年中

瓦曾根溜井に西方村河岸場（船着場）が設けられる。

一七二二 享保7年

本所上水完全廃止となる：水量、水質、季節変動等による。

一七七三 安永2年

瓦曾根村河岸場を西方村河岸場の上に設置したのでそれぞれ“上の河岸場”

“下の河岸場”と呼ぶ。（図1）

両河岸場間で訴訟が起こる。

後に両河岸場が合体し差配人に西方村中村新六、見廻り番に瓦曾根村中屋

五郎右衛門に落着す。（図2）

一八七〇 明治初期

瓦曾根河岸場の備船

一〇〇石積高瀬船 四艘

八〇石積似船 四艘

二〇石積伝馬船 一艘

川下小船 十三艘

一八九〇 明治23年 大水害 この時大袋第二駐在所田口久五郎巡査水争いで殉職。

一九一〇 明治43年 大水害(写真3)

一九二一 大正10年 中川の河道直線化工事。

一九二四 大正13年 瓦曾根石堰を甲門式鉄筋コンクリート堰に改築する。

(通称赤水門という) (写真4)

一九四七 昭和22年 九月カスリーン台風により大水害。

一九四九 昭和24年 瓦曾根土橋を改造し鉄製手摺を取付け“へいわばし”と改名。

一九六〇 昭和35年 元荒川の用排水の分離工事、東武鉄橋までの護岸拵巾工事等を行う。

一九六七 昭和42年

一九六六 昭和41年

5月新平和橋が越谷駅前市役所通り元荒川に完成。

11月23日深夜“へいわばし”の中央部が折れて川に落下する。

平和橋が新平和橋の延長線の葛西用水に完成。

3月瓦曾根溜井埋立地に市庁舎が完成。

8月戦後初の花火大会が市庁舎横元荒川にて行われる。

6月より「ふるさとの川モデル事業」工事始まる。

11月「しらこぼと橋」が旧石堰跡に完成。石堰石は行方不明となる。

一九六七 昭和42年

一九六九 昭和44年

一九七二 昭和47年

一九八五 昭和63年

一九九四 平成6年

二科会創立者の一人

画家 齊藤豊作生家跡

(写真7)

(写真5)

一九九六 平成8年 赤水門と呼ばれた瓦曾根堰撤去される。(写真6)  
一九九九 平成11年 縮小された新瓦曾根堰が旧赤水門上流30mに完成。

一八八〇 明治13年 6月1日齊藤豊作南埼玉郡西方村(現相模町)に生まれる。

一八九〇 明治23年 3月大相模尋常小学校、越ヶ谷高等学校卒業。

伯母の養子となり東京開成中学校入学。

一八九九 明治32年 4月東京美術学校(現芸大)西洋画科本科に入学。

一九〇一 明治34年 同校選科に進学。

一九〇二 明治35年 第七回白馬会に「風景」を出品。

一九〇五 明治38年 同校洋画科選科卒業。

一九〇六 明治39年 11月フランスへ留学。パリ近郊、イギリス、ブルターニュ地方、オランダに遊学。

一九一二 大正元年 フランスより帰国。光風会第一回展に五点出品。

一九一三 大正2年 第七回文展に「夕映の流れ」「落葉かき」を出品し褒章を受く。

日光湯本に写生旅行。

一九一四 大正3年 二科会を有馬生馬、梅原龍三郎、坂本繁二郎、石井柏亭、山下新太郎ら

と創立し鑑査委員となる。同第一回展に九点出品。  
有馬生馬と河口湖畔に写生旅行。

フランスの女流画家カミュー・サランソンと結婚。

二科会第二回展に七点出品。

病氣。

山下新太郎、梅原龍三郎と熱海に長期逗留。

二科会第六回展に四点出品。

フランスへ妻子とともに渡り、サルト県ヴァネヴェルの古城に居を構える。

以後描画から遠ざかり日本人留學生の面倒と、日本から依頼のフランス

画家の作品の蒐集を請負う。

大戦中はフランスにて抑留生活を送り、健康を害する。

フランスヴェネヴェルの自宅にて逝去。

埼玉会館での斉藤豊作、倉田白洋遺作展に23点展示。

銀座ギンキョウ画廊にて斉藤豊作回顧展。

埼玉県立博物館にて斉藤豊作展

8月〜9月埼玉県立近代美術館にて「斉藤豊作と日本の点描」展。

- 一九四一 昭和16年
- 一九五一 昭和26年
- 一九六九 昭和44年
- 一九七二 昭和47年
- 一九七九 昭和54年
- 一九八七 昭和62年

- 一九一五 大正4年
- 一九一六 大正5年
- 一九一七 大正6年
- 一九一九 大正8年
- 一九二〇 大正9年

文化十年（一八一三）にタイムスリップ。十方庵敬順が観た

## 大相模不動尊全景

（図3・写真8、11）

「内は十方庵敬順著 遊歴雜記より引用文

### 1 門前町の賑わい（図4）

「大相模村の入口より切石敷ならべ、農民の垣生も町家に似て、路傍の両側に軒をならべて、その間四五町（五百米）」

座敷付茶屋、草加屋、寿屋、末広屋、旭屋など。

雑貨、荒物、太田屋など。

おみくじ、ローソク、線香、鎌倉屋など。

車屋、桶屋、植木屋、建具屋、古着屋、傘屋、そうり下駄屋、呉服反物足袋屋、卵屋、

豆腐屋、湯屋、八百屋、酒屋、米屋、煎米菓子屋、水菓子屋、髪結床屋、そばうどん屋

だんご屋、金魚屋などなど。

### 2 良弁塚旧跡

天保八年（一八三七）九月惣門の南の池畔に建立し、後総門西側に移転。

### 3 石橋と水堀

### 4 石垣土塁と木立（クス・ケヤキ）

### 5 高札跡

「門前に法則の高札を建たり、制札左の如し

禁制

- 一、山内之竹木不可伐取事
- 一、山林之内殺生堅不可致事
- 一、狼籍之輩猶有之者捕置可訴出事

寛保四年甲子二月

右寛保四年文化十年酉年にいたりて七拾余ケ年に及べり」

## 6 惣門（仁王門）

「往來の南向きにありて しかも棟高く 彫ものは巧工を尽し 取分右の角より式本目の柱の上に牡丹をくわへし獅子の容躰 いかなる番匠が作りしやらん 此門東西五間余 南北式間」

一七四四頃寛保4年 一層の表門を建立し門前に制札を建てる

一八〇四 文化元年 12月二十三世木食戒円師が二層形式瓦葺大惣門を建立

一八四八 嘉永元年 三十世信剛比丘は惣門が大破したので屋根を銅版葺にす

一八八〇 明治13年 惣門破損

一八八四 明治17年 惣門を大修理し、二層形式を一層形式にし現在に至る

一八九五 明治28年 7月大聖寺大火災あり、惣門は延焼を免れる

一九〇九 明治41年 2月不動尊春季大会式では惣門壇上にて四師の大演説会と蓄音器の余興を行う

一九七六 昭和51年 仁王像二体を解体修理する

## 7 「惣門修繕」の碑

一八八八 明治21年 4月惣門の東前に建立

8 真大山梅園跡

一九〇七 明治40年 2月大火災後の大聖寺復興の為高岡隆円師が旧庫裡跡地に造園す

(梅木名) (幹廻り) (樹 齡) (記念名)

十善梅 四m 七百年 開園記念樹

四恩梅 三m 五百年 天皇即位記念樹

千代梅 一・四m 二百五十年 日露戦役記念樹

心月梅・神光梅・將軍梅・加持梅・和楽梅・飛龍梅・三光梅・不老梅・東照梅など

銘木多数あり

他に“名譽の藤”百五十年 日露戦役記念樹

9 庫裡、書院、講堂の跡

「左の方は僧坊が藁をつらね、塀の外には出茶屋おのおの床几をならべ 右の方は尼店とかやいうもの庇をおろして小間物類をはじめ心々の商いは処柄とて見馴れぬ品々をならべ飾るも又珍しい」

一七一五 正徳5年 隆元 講堂食堂方丈衆寮を造立す

一七二〇 享保5年 2月25日大聖寺火災にて講堂房舎を焼失する

一七三五 享保20年 4月本堂、講堂を寄進にて再建する

一八九五 明治28年 7月の火災で庫裡、書院、講堂とも焼失する

10 黒門 (写真9)

一七一五 正徳5年 講堂の通用門として建造…私説

一八八七頃明治20年 画家倉田弟次郎「黒門」を描く

- 11 二天門（矢大臣門・二天門時には仁王門とも云われていた）（写真8）
- 一八九五 明治28年 7月大聖寺火災の時焼失を免がれる
- 一九二五 大正14年 本堂（現）庫裡の再建時に移築（現在地へ）：私説

「二重屋根の楼門にて上下に額あり 上なるは弘法の筆意にして不動尊と書 下なるは左理郷の筆法を以て真字に不動尊と認めたり 但し式額ともに筆者の名印なきこそ恨みなれ。矢大臣門東西五間余南北二間」

一七一五 正徳5年 隆元は二天門を建て釈迦三尊像、十六羅漢像を安置し 門の両側に持国、多門の二天像を置く。

一七二〇 享保5年 2月の大聖寺火災で講堂、房舎を焼失す。本堂、二天門は火災を免れる。

一八一四 文化11年 矢大臣門は二重屋根楼門 東西五間余 南北二間

12 御座の松：現在のは二世（写真10）

一三〇九 延慶2年 故事に習い御座の松を植える

一八九五 明治28年 七月の大火災を免がれたため“火除けの松”と呼ぶ

一九六〇 昭和35年 初代御座の松枯れる。初代の実生苗を同位置に植える

※樹種は昭和初期植物学者の鑑定では近畿地方自生の垂枝赤松という

13 東照宮跡

一六六〇頃寛文中 最初の東照宮を建立 御神体として慶長五年九月関ヶ原の役戦勝祈願使用の太刀を納めた

一六七八 延宝6年 6月17日東照宮再建 御神体は太刀に代えて神君木像とす。この時綱吉公より御紋付の香炉、花瓶、三方、戸帳、御神陶、桃灯、供器を

拜領する

一六八一 元和元年 東照宮祠を不動堂の南西にトす

※東照宮のその後 明治28年7月の大火災の記録にはない。察するに明治維新後の神仏分離に際し撤去処分されたものと考察されるが処分方法、移転先など不明。

14 心字池、弁財天、愛宕山

「右手には酒樓、食店の家居五七軒又東に裏門あり是つゝひじ等への往還なり」いづれも記録なし。

15 含満井、水垢離場、滝の坊跡

「矢大臣門近き右の側に垢離場あり、垢離室あり、此あたりより境内次第に末広がり奥深い」

一七二五 享保10年 英山 含満井を掘る

一七七四 安永3年 北向不動像を東方村中村庄右衛門奉納

一九〇九 明治41年 4月五師による伝導大演会、余興の蓄音器、芝居を滝之坊にて開催。

※明治28年7月の火災で本堂を焼失、本堂再建の為広く寄付金を募ったが大正12年9月1日関東大震災で中止となった。：本堂再建寄付金石

16 水屋

初期の不動堂建立当時より水屋はあったろうが

一六六四 寛文4年 瓦曾根溜井草堰を石堰に改造した際残り石にて大相模不動堂及び瓦曾根照蓮院の手水石を造る。

※右の手水石行方不明

17 不動堂跡 現在の不動堂の裏、元荒川沿いの高き処にあった。

「不動堂は八間四面、四方勾欄にして南面に作れり 正面の御厨子には公の御紋を高彫にし、すべて内陣壯嚴、絵馬をはじめいろいろの寄進奉納の品は堂内に夥しく目を驚せり 正面に阿遮殿と横三文字にしたためた額は朝鮮国慎齋の筆にして名印あり大きさ横六尺 縦三尺余 又古来より奉納の絵馬文禄、慶長、元和、寛永年間等あれば年古し道場と見

ゆ」

七五〇 天平勝宝二年不動坊創建と伝えられる

九三九 天慶二年 真大山不動坊開基と伝えられる

一五九〇 文禄年間 不動堂に文禄の絵馬あり

一六六〇 寛文中 不動堂拜殿を建立

一七二〇 享保5年 2月大聖寺焼亡 不動堂は火災を免かれる

一七二八 享保13年 9月2日元荒川氾濫し大聖寺（本堂とも）流失

一七三五 享保20年 4月本堂、講堂を寄付にて再建する

一八一四 文化11年 不動堂は八間四面、四方勾欄

一八九五 明治28年 7月大聖寺大火災、不動堂焼失

8月仮本堂を旧本堂跡の前方に建てる

一九二二 大正11年 10月本堂再建計画案できる。規模は十間四方

宮大工 佐渡島 明石近陽氏に委託

一九二三 大正12年 8月本堂再建計画認可 見積価格十六万円

9月関東大震災により仮本堂倒壊する

一九二五 大正14年 震災により神社建築、寄付行為は禁止される  
関東大震災の際残った大師堂、講堂の材料を利用し二万八千円にて

現在の本堂、庫裡を建てる

一九九六 平成8年 法要殿を新築。この時庫裡は解体処分した。

### 18 鐘楼跡

八〇〇頃延暦年間 梵鐘鑄造：戦中供出した梵鐘に刻字されていた

一七六六 明和3年 延暦年間鑄造の梵鐘の破損甚だしく信徒らの貴金属を混入して自坊にて再鑄造する（梵鐘銘）

一八九五 明治28年 7月大聖寺火災にて鐘楼焼失し梵鐘地上に落下

一九四二 昭和17年 11月戦争により梵鐘供出：溶解して兵器にする

一九八五 昭和61年 10月新たに鐘楼、梵鐘を池畔丘上に建立する

### 19 籠堂跡

一七一五 正徳5年 参籠所を造る

### 20 地藏堂

一八二三頃文政元年 この頃既に存在しているが創立は不明。

### 21 東門

古くは裏門と呼ばれていた。また色彩から「赤門」ともいう。

一八二三頃文政元年 裏門に「真大山」の額あり。

一八九五 明治28年 7月の火災は免れる。

一九八六 昭和61年 8月改修築し現在に至る。

### 22 百庚申跡

（写真11）元の位置は旧本堂の裏、元荒川土手沿い。

一九一〇 明治43年 8月元荒川出水し百庚申石を防水堤に使用する。

一九五三 昭和28年 百庚申を東門内側両側に移設整備する。

23 火傷に耐えたタブの木 市指定天然記念物

24 北門と不動の渡し場跡

一六二〇元和・寛永の頃 不動堂の後に御鷹野橋とて新方(領)への通路あり

一七一六 享保 赤岩村(現松伏町)甚八、不動堂裏に家作住居して渡守および湯水期

一七四〇 元文 の仮橋の手入れする。

一七九七 寛政9年 大聖寺持川船の儀は一通りの田舟と違い余程大船に有之

25 参考資料 不動橋

昭和31年8月 増林、大相模の統合中学校の通学路として木造橋開通

昭和42年4月 鉄筋コンクリート橋に改造

平成6年8月 10m下流に架け替え開通

## 幕府御用達の越谷糶

瓦曾根村 中村彦左衛門

明治四十二年七月七日付 埼玉新報 「越ヶ谷糶の由来について」より

往古埼玉郡瓦曾根村に中村彦左衛門という者あり。徳川幕府より年々越ヶ谷糶二百俵以上五百俵以下の御用を承わりて首尾能く御用を弁じつつありしを以て、中村家は苗字帯刀御免並に若干の御扶持を頂戴し居りて 幕府が大政奉還当時まで継続しつつあり。而して越ヶ谷糶と称する同地方付近に於て産出する糯米の総称と成れるが、中村家より徳川幕府に納入したるは細糶と称する種類にて、同家独

専のものなれば、現在に至るも細糯の種子は中村家の外作付を為すものなし。且つ該種は耕作甚だ困難にして収穫の如きも他の品種に比して一反歩優に一俵以上の減収なりと云う。去れば幕府御買上げの当時も、他の上糯に比して価格は一斗高の割合を以て計算せしものなりと云う。而して該糯米の取扱方に付ては頗る訂重のものにて、先ず倉庫を別にし周囲に注連を張り仙台飾にて秕若くは捻れ粒を選り分くると云う。殆んど一粒選りとも云う可き程にて其仕上げを終れば其内一俵を御搗き試しと称して前送りを為すものなるが、此時は「御用」の札を真先に押し立てて人夫に荷わせ「下に居ろう」の掛声にて江戸御米蔵に送り付くるものにて此際通行の諸大名と雖も悉く道を避くるの規定にて其勢いは実に宏大なるものなりしと。(以下略)

(国立国会図書館蔵)

鳥文齋榮之筆

## 瓦曾根溜井図

瓦曾根村 中村彦左衛門家元所蔵

鳥文齋榮之は宝歴六年(一七五六)旗本細田家の嫡子として生まれる。父は勘定奉行、榮之も小納戸役を務めたが辞職し、鳥居清長、喜多川歌麿に師事して浮世絵を修業、美人画を得意とす。現在国の重文指定もある。瓦曾根村中村家とも昵懇の間柄。榮之が中村家を訪れ描いたのが「瓦曾根溜井図」である。絵は中村家から越谷市へ寄贈された。

(越谷市指定文化財)

きゅうみん きゅうじゅつ  
窮民救恤の碑

瓦曾根村 観音堂跡所在

(碑銘の要約)

瓦曾根村中村彦左衛門重梁は、代官久保田十左衛門支配のとき凶年年当金として幕府の御貸付所(銀行のような所)に預金していた。天明年間(一七八〇代)の凶作年に御貸付金の元利ともども下金(引きおろし)して窮民に与え飢饉より救った。重梁の次男は浅草福富町の池田屋市兵衛方に婿養子として迎えられた稲垣宗輔のことで、彼は父の遺言を守り文化三年には金五百両を災害窮恤金、文化十一年よりは災害備金として毎年五十両宛、文政九年は金百両を浅草猿屋町会所御貸付(奉行遠山左衛門佐支配)に凶年手当金として預金し、天保七年(一八三六)の大凶作にはそこから金九十二両を下ろして瓦曾根村のうち農民九十二名の窮民に金一両づつ施金した。

この銘文は縁者の恩問村の国学者渡辺荒陽である。

## 瓦曾根観音堂跡の力石

瓦曾根河岸をひかえたここ観音堂境内は河岸場で働く人たちの溜まり場で、余暇には相撲や力石持ちが盛んであった。三ノ宮卯之助もこの河岸場で働いていたのか文化十二年(一八一五)に江戸本郷の力持久蔵と共に七十貫余(二六三匁)の力石も持ち上げている。この時の力石は最近行方不明となつてしまった。

甲斐武田家公胤

# 千徳丸供養塔

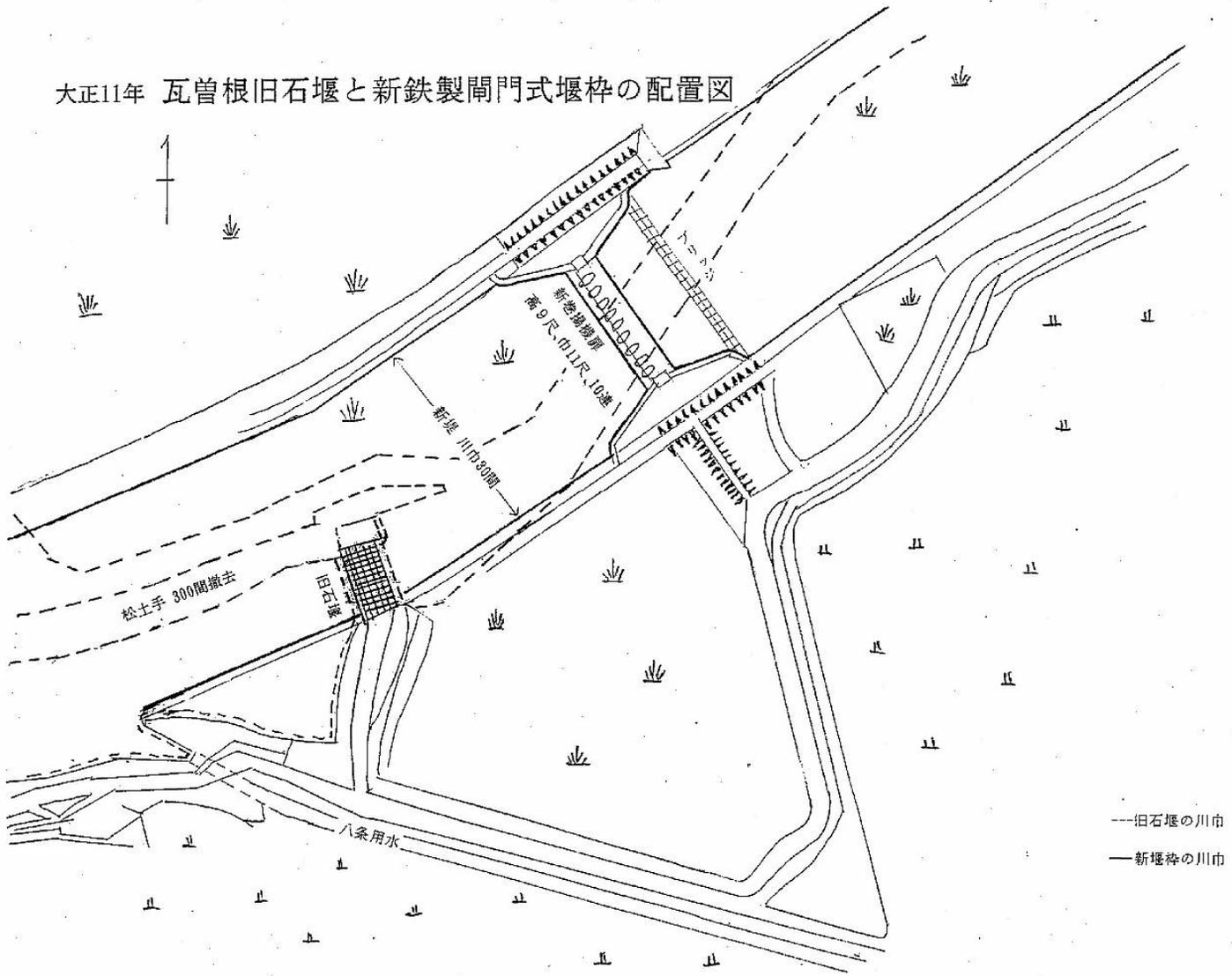
(図5)

瓦曾根 照蓮院 秋山家墓地

天正十年(一五八二)三月武田家没落(武田勝頼天目山にて死す)の後、武田氏諸士大将の一人秋山伯耆守信藤その子長慶および家族等は時節を計り一先ず乱世を避けんが為武田家公胤千徳丸を衝り伴ひ越ヶ谷領槐戸(現七左町)に落延び潜居し後瓦曾根村に移住す。この君は程なく早世すという。今瓦曾根村照蓮院地内秋山氏本廟の中に五輪塔ありてこれに御湯殿山千徳丸と彫り付けあるはその説に合へり：(略)：長慶はこれを悲しみ照蓮院住職となつてその菩提を弔つた。その後寛永十四年(一六三七)千徳丸の供養塔を造立す。

(秋山家由緒之記より)

大正11年 瓦曾根旧石堰と新鉄製閘門式堰枠の配置図



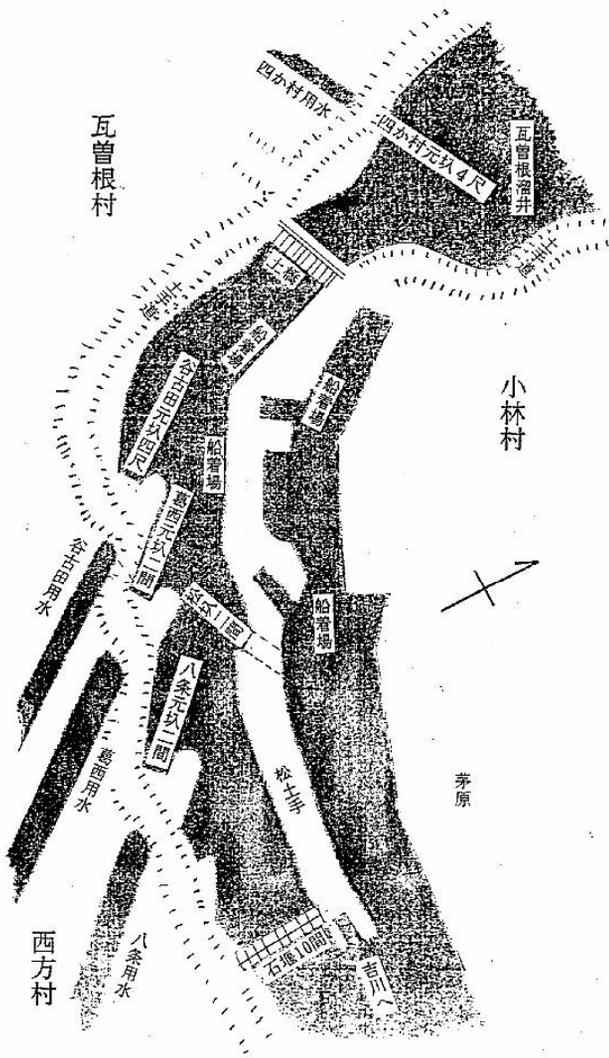


写真1 慶長年間に創設した瓦曾根草堰は  
寛文4年(1664)石堰に改造した(大正2年頃の写真)

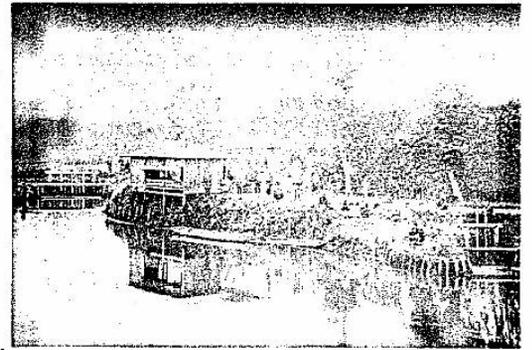


写真2 瓦曾根溜井の風景。左は葛西用水水、右は谷古田用水水  
家屋は茶店

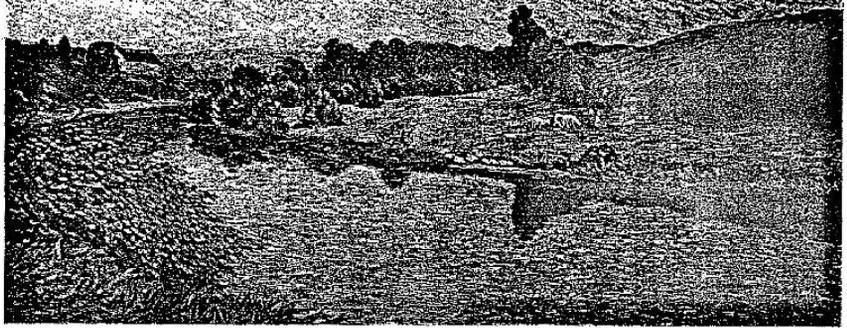
図1 瓦曾根溜井図 (江戸末期)



図2 瓦曾根河岸場の見廻り番中屋五郎右衛門は越ヶ谷宿入口にて商売をしていた (江戸後期・諸国道中商人鑑より)



写真10 大聖寺の「御座の松」。明治17年頃撮影



斎藤豊作「夕映の流れ」1913年

写真7 斎藤豊作画「夕映の流れ」第7回文展入賞作品



写真11 旧本堂裏にあった百庚申の中央部。青面金剛と二猿。昭和63年2月20日撮影

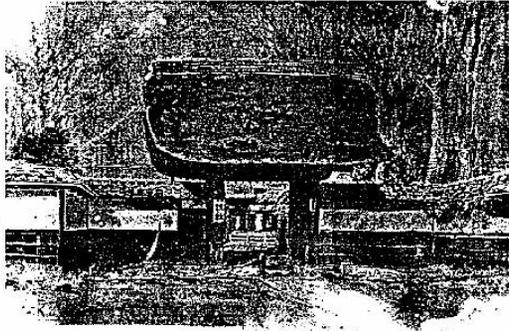


写真9 倉田弟次郎画「大聖寺の講堂の黒門」。明治22年頃の作品

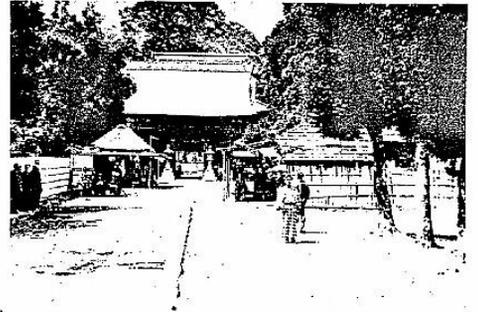


写真8 大聖寺の二天門。明治17年頃撮影

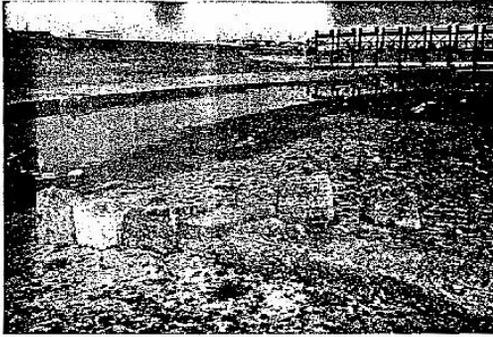


写真5 石堰跡(手前)と閘門式堰(遠方)。昭和63年2月20日撮影

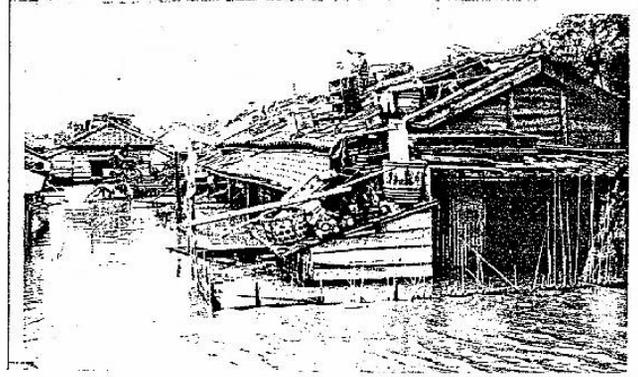


写真8 明治43年(1910)の大水害、以後中川の直線化工事等を行う

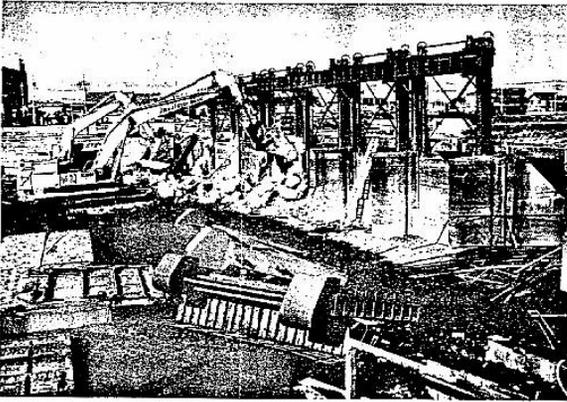


写真6 閘門式堰の解体作業。平成9年1月28日撮影

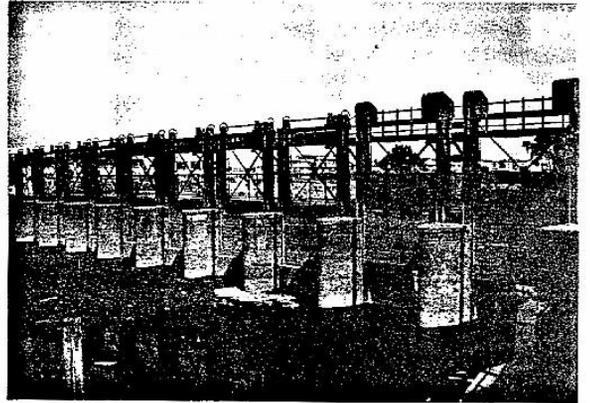
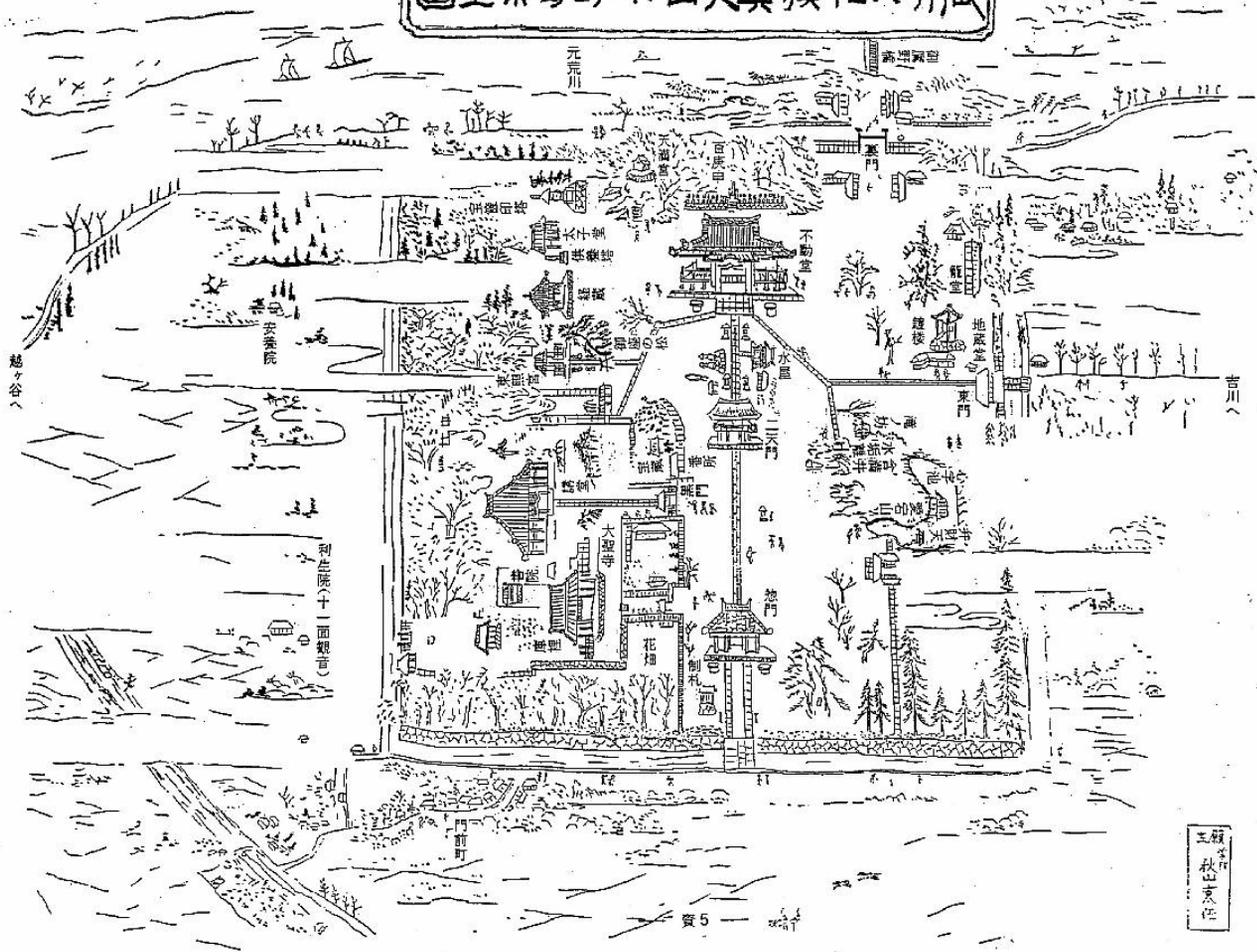


写真4 大正13年3月竣工の閘門式鉄筋コンクリートの瓦管根堰

図 9

# 武州大相模真大不動尊全景圖



昭和二十九年発見した原図を書き写して縮小し建造物名等を記入し平成七年完成

作成者 高崎力

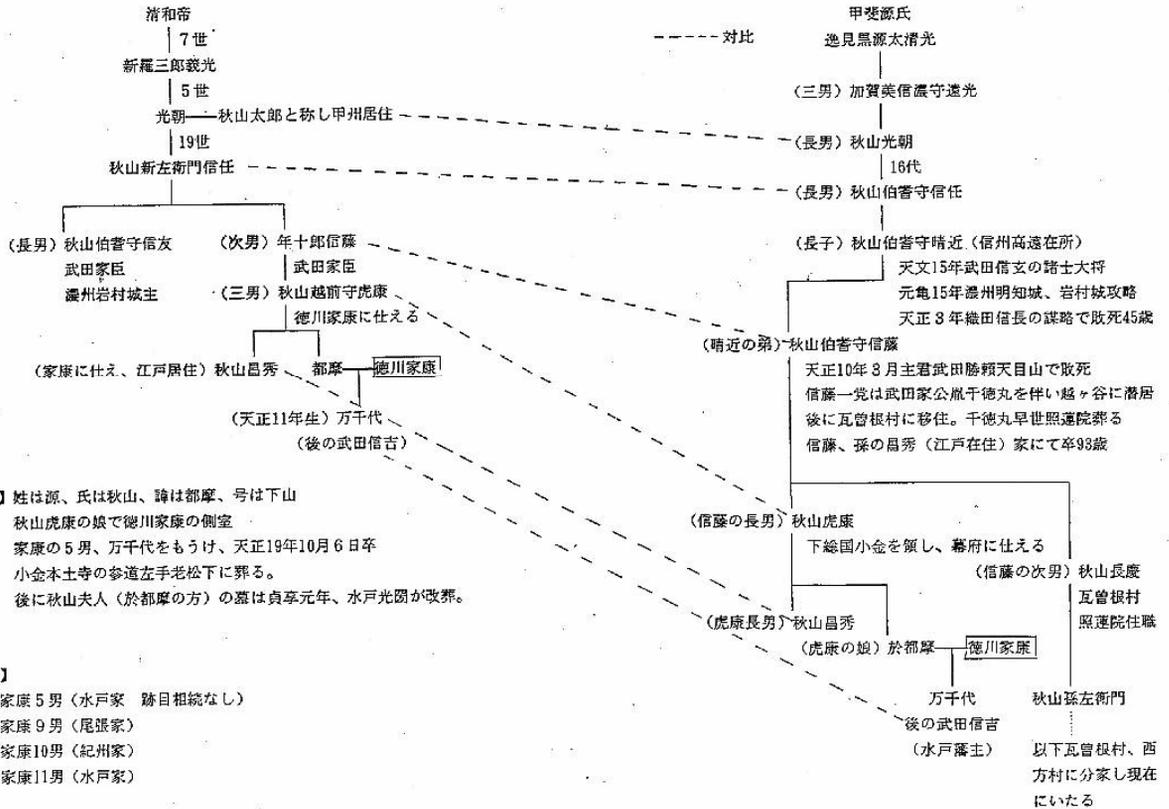
三顧堂  
秋山玄任



図5

松戸 秋山家

越谷 秋山家系



【於都摩の方】 姓は源、氏は秋山、諱は都摩、号は下山  
秋山虎康の娘で徳川家康の側室  
家康の5男、萬千代をもうけ、天正19年10月6日卒  
小金本土寺の参道左手老松下に葬る。  
後に秋山夫人 (於都摩の方) の墓は貞享元年、水戸光圀が改葬。

【徳川御三家】  
信吉…家康5男 (水戸家 跡目相続なし)  
義直…家康9男 (尾張家)  
頼宣…家康10男 (紀州家)  
頼房…家康11男 (水戸家)

◎皆様のおかげで越谷市郷土研究会はこのたび創立35周年を迎えさせていただきました。ところができました。こころよりお礼を申し上げます。当会は昭和40年の3月に「もっと越谷のことを知りたい、研究したい」という思いをもった有志の方々により創立され、以後、市内の文化財・資料の調査研究、郷土の歴史についての啓発、研究者間の連絡などに努力しつつ、また、会員、一般市民に対して「史跡めぐり」という楽しい行事の提供を行なってまいりました。

◎特に、個人がいかに充実した余暇をすごすかということが、人生の意義のなかに大きなウェイトを占めるようになったいま、私ども郷土研究会は郷土に対する関心、興味が「余暇の充実」、それも「黄金色に輝く充実」をもたらず基因となることを確信し、各種のイベントを通じて、その関心、興味を会員、一般市民の方々のこころのなかに育ててゆきたいと考えております。

◎そして、35年前の「もっと越谷のことを知りたい、研究したい」という諸先輩の気持ちをそのまま受け継いだ団体であることに誇りをもち、それをこれからも忠実に引き継いでゆきたいと思っております。

◎今後とも、さらなるご芳情、ご支援をたまわりますようお願い申し上げます。

平成11年 夏

越谷市郷土研究会 会長 谷岡隆夫

○35年永年会員紹介 創立以来の会員8名 (敬称略)

会田 俊 有瀧龍雄 木村信次 木原徹也 小島 誠

高崎 力 谷岡隆夫 本間清利

○歴代会長のプロフィール

初代 大野伊右衛門 S 40・9～52・8

旧出羽村四丁野の旧家出身。久伊豆神社の氏子総代。52・8に92才で没。

2代 小島 誠 S 52・9～H 6・3

平方在住。長年、教育界に奉職。S 44年越ヶ谷小学校校長退任。

H 9年春 叙勲

3代 谷岡隆夫 H 6・4～

宮本町在住。創立より会務に尽力。

H 3年都内繊維商社退職。趣味・ぶらり旅。